

笈埃随筆

利
六五

庫文閣内			
三函	四五	三五五七〇	和書類
四架	四册	〇	



史
二
三

内閣文庫		
番號	和	35570
冊數	4 (3)	
函號	172	78



南川

笈埃隨筆五

目錄

- 一 皇居祥瑞
- 一 封疆
- 一 山姫
- 一 十津川
- 一 鶴洞
- 一 都の花
- 一 淀水車
- 一 七里の花
- 一 急流再考
- 一 隠岐
- 一 飛鳥川
- 一 奇石
- 一 小笠野
- 一 養父暇録
- 一 八百比丘尼
- 一 比良嶽
- 一 海市
- 一 不破比呂

松井藏書

有徳ありて之徳の少く只二つありては
よき言ありしきくは國々より於(登)る人ハ心と角多(き)の
しや先を都たしめと多し知次ハ心と角多(き)の
とく一六神社佛園の結構壯麗とのこし
懐縁よ曰居居有立喜二喜多善人二喜多好来二喜多善
物四秋多佳系二秋多天體とく又貝京氏篤信我邦京洛の
又東とくし十粒の十偶了二禁願を了二了水大天二風系
和し曰く山門徳也二風俗好く二義祝多く七了佳相多く八了文
籍多く九了良工多く十了學者多しとくは東嶽よ志り
傳文今文苑の世とく人故実と考りて本と中雅と貴は
太平の潤化より一縁秋紀本一高貞怒曰史子曰古之愚ヤ平直
今之愚ヤ平直已耳とくは鐵より良音人ハ修り也とく本とく
体の中し奮動せし元禄の末中十二歳の以室町二條南上極本
却十節とく古義古書画よりこの目利者一也とく清方却平節とく
名せり是ハ衣履下とく是袋下中とく此等近も是くの為とて用

廊下服先柄袴を履も清くあつてはとくわたり又物々の奥物野菜
も平四の柄柄よ豊くせし是全く思ふ好むし何れハ天性好む
とく中もわくはびよのわじよ先家居も表二階の格子連とく
格の角本とく銀鹿の大木本柄は細きは三行を竹とく是も清
よ祖もて居先格子のりく多し是も是も本とく貝の座を模柄に
く中し叙中座よ泉水とく是も泉銀葉とく教多養正りく是より
居間の二階ハ階とく掛わつは階子とく角板造りきわつとく高欄付
小西ハ隣家の壁とく之と白壁とくわつとく一西ハ雲滄山水とく画く天井ハ
紙とて漫回く古画とくて交張り今世と大木とく行院とくとく
今初と彫り行の只と隠せし佛老を多し馬九西とく行院所とく
何と又洛下よ二階多あり角倉十郎念融酬倉とく付内古在
倉此町よりしを家格揃りる本とく是葉とくしとく長押の戻行のん西
御とく心も厭ふ木の飛と造りて中とく是等とくしむ若付とく行
院とくとく元禄の以止ハ成家町也ハ勿傷成也しも若付の念於
て用也の事希なりしとく世人来りて是る者も介依て自他と名

寺のほとりより又懐き岩のりなり二丁たよりなり
て尾より実尾より作して立たるん振らるる岩の上の方の程
とくく高くまきつて後いづとて谷川の崖と見えて見らる也

小昔野

警尾山根元の金蔵玉造に上り二里東の山麓に初り生駒山
みしてその西の方之林より千丁及より谷川は流れて東の山麓
を千八丁の石た右の石のせりおむれ而林を尾より尾元九里映
し目より先めく上りて一帯より想世音と平音と以眺をまじり
ハ高根石の門より後路拾得の陣よりより子取而取多し本如く南
ハ河内和泉の度脱脚と紀の路より連り少其西多田橋尾の心
連綿とて眼下に復華の石方の家墓石の如く石而の橋の墓本
より何より川はのび又年又葦のとなりより一瞬より六ヶ園よりなるの仕
觀之進き三本高溪俵成初河法師ととりよれて付し此をまじり
尾より尾元の心の盧山よりより似多りと小盧山といひたれハ小
一野とまきせんといふ

養父明神

但馬國妙見山の林下の観音寺村より坂乃百丁平ら信坊十八
丁二月十八日と塔とて隣園より一帯信野より六丁方より
乃路のりより古木の根枝を株行れも園園之園より七八園より
よりて又より竹林の如く散り敷ひよりより後之坊の末宮より後
の若希とて養父とて林の亦多し生れ公の後の林下に養父
明神といふ林内よりより後之坊の末宮より大石とて後之
雌雄と彫造り鉄頭とて繫きよりより後之坊の末宮より
の如く隣園の材よりより猪鹿の顔の田畑と先よりより後之坊
一帯信よりより後之坊の末宮よりより後之坊の末宮より
と解してを致しよりより後之坊の末宮よりより後之坊の末宮
して後之坊の末宮よりより後之坊の末宮よりより後之坊の末宮
いふよりより後之坊の末宮よりより後之坊の末宮よりより後之坊
一帯信よりより後之坊の末宮よりより後之坊の末宮よりより後之坊
より物よりより後之坊の末宮よりより後之坊の末宮よりより後之坊

限る終系極つらうく、頂とわたりわねのナヨホの使わうつらの使わ
よりん舟路村百姓の女房の者らうつら女おとせぬゆては使
よと初史もあつらうしよ後まうてい人もいひ怪をらう或は
史の孫と付てあつらふらうい嶽の上うて使又の暫くあつて史
より出権況宮上使てつらを途よ史は受て捕らる女のおわらう
らうか、史のまうるを介られてつら初ら使しよと史も怪言を
く眼よまうらるは後いひ怪を色はつらうの里人の使のまうる
といひ傳通の路とてあつて途のうらをまうる所は怪言より上う
ては使のまうつらつは使の尾流使水の尾流あつらう白長
舟のゆ秋もまうるに樹乃よまうる友よは使と根原ともあつら
もよつは秋使水の七方まうる米田とあつらうの意曲ももは使又
ち治教よまうる米田とつらつらと中相樂講よつらる方よまうる
まうる米田とあつらう

海市

登州志評林 春夏時遙見水面有城郭市肆人馬往來若交易
狀土人謂之海市云云大論曰日初出時見城門樓櫓宮殿行人出
入日轉高博威名但可眼見每有實名捷聞婆娑城云云花嚴言義
曰西域名樂人為乾達婆彼樂人多幼作城郭須史加故因則謂龍臺
所現云云我因大北海ノ中ノ就中ノ奥津の浦と云と
以二月の圓天紅のまうるまうるも風まうる時海をいひ現はま
飛相おつらう二書のあつらう或は二附の時よまうる日初よは心は
いへも吹所いおつらうまうるまうるまうるまうるまうるまうる
あつらう海邊の人の能くまうるまうるまうるまうるまうるまうる
いへまうるまうるまうるまうるまうるまうるまうるまうるまうる
ては蓬萊といふ所の飛ちうらるるまうるまうるまうるまうるまうる
よ乾城信曰雲氣在雲大蛤といふまうるまうるまうるまうるまうる
耳聾角のまうるまうるまうるまうるまうるまうるまうるまうるまうる
蘇軾嘗て海移し行らう感嘆といひし詩あり

東方雲海空復空 群山出沒空明中
 蕩搖浮世生万象 豈有具闕藏珠宮
 心之所見皆幻影 敢以耳目煩神工
 歲寒水冷天地閑 爲我起蟹鞭與龍
 重樓翠阜出霜曉 異事驚倒百歲翁

不破園

長濱園少しては園の跡今ハ園ヶ原といハ驟之垣京極の山から
 以来荒れぬ極と他例といはれり又是利の公方普光院の居士
 後の附屬としてハは食いのわち園元の荒れぬと造り改り
 ちつひに御まは方の風情の系及ぶるといハ不興あやむらん
 昔多し月とともハ林板敷とくはあつせ不破の園也
 と御まは方の出来をせめては公よけりといハ公と
 世人嫌うといハ彼居士は後死といハ公を敬ふたに御まはり
 せ死すといハ公もはじとハ極り難くは公方の御自余の後
 庭とハ公も是といハ後後院とハ公方の園能作兼吉が家書に

普光院の居士は後死の附屬相續進しをり由りし附といハ公と
 といハ公は好むといハ公のよろとを記し是を公の遺言と云ふ
 公居士は後死の死といハ不破の園なりといハ公の遺言と云ふ
 園の元を公の遺言といハ公の遺言といハ公の遺言といハ公の遺言

神泉苑

此地ハ乾原園として方ハ丁の園として代々の帝王御地
 あり弘法大師の遺言の法と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
 傳といはれり也といハ小寺山向うなりや日の本うんといハ公の
 といハ公の遺言といハ公の遺言といハ公の遺言といハ公の遺言
 一育の神小町の公のやといハ公の遺言といハ公の遺言といハ公の遺言
 らぬといハ公の遺言といハ公の遺言といハ公の遺言といハ公の遺言
 今もいハ公の遺言といハ公の遺言といハ公の遺言といハ公の遺言
 本直布といハ公の遺言といハ公の遺言といハ公の遺言といハ公の遺言
 又早振布といハ公の遺言といハ公の遺言といハ公の遺言といハ公の遺言

言はく今て岩戸より獅子の口と開くは後してさき後三十空間
もや何れ九南面せり口より奥より本二十間半の空を石障
乳の板の如くよりりたる教よき以長き八行丈の太き式之入余
一も思ふるらん米板の如く中なるを造るべくよきなりて飛翔の
を形肖しく腹白く尾短くして燕に似て一足は舌付寄りの三
生して又二個外に出る寄中の神使といわれ百程舞う舞う又形来い
るもの迅速なりて鳥といふ定難し長き舌と捕附八材の程の掌
出来ると大風浪水等の變りて風の吹きさるるが以て依て人馬とく
捕らるるは又困り一足の高きものなりてさきよりさきは寄中より
うらん洞の中二十間半の空を止りて止りて是進は口度より左後
らりて右の如く右曲りて右に洞の元りの周りを廻りて右の如く
知と縁の眼と因て後なるき一足は白く十間半の空より舞りて
してはさ知難く又上の方より後より胸よりも志り難く傍の
岩角に降りて見ると遠の處より隨の如くきてさきよりさきより
是水よりより一足は白く自ら下りてきてさきよりさきより

神仏の靈水とて汲めて飲付百病と作し長生不老なりと又
一足は白く依りて懸依りて本よりと村氏の傳りて

吳服元の織社 兼 二星社 馬王高

應神帝の所定百段園より工織の二女をとり秋園初て感誼の
業と知れりて女と吳服元織りて今後別豊高秋園村西南
田園に二秋^織之山の山とて二秋^織織りて今後別豊高秋園村西南
秋末と因りて二神婦女のちりて今後別豊高秋園村西南
一十月十日と針伏奉りて婦女酒食菓候とて以て夫人下登候是
竹の中末とて以て母別香良例の漢より里合村とて奉牛織女の二
星とて今より又河州牧方村とて天の川より今河川より二星とて
古高仰りて古今業雅抄より荒花園大為星とて少彦星とて統
一南の織女とて今二秋の事より川とて天の川とて女とて今二星
夫星の言より今七月節より七月の夜より今川中より極と
昇て遊りて今遊の上中より男女の衣と書て今遊りて今遊り
よありて今遊りて今遊りて今遊りて今遊りて今遊りて今遊りて

く天の川をまね思ひたりとて古今集よ

秋風の吹よ一日より久この天の河原よとぬ思ひたり
世古糸の鴨川倍水夜くたりたり防鴨江使持之收を中
以阿於法明夏の高玉の徳と勝を多うて漸く水龍うて種成
し丸法城寺といふと妻立人は水去て古成の字義其寺今八心
光寺とて河原よりうを高玉の徳今のは糸自伝の世古糸の徳と
之秋鴨川原てまらしをたるとして高川町といふ也

十方唐曰七夕の故来よ素牛織女妻合の後、異邦の事やして我
國の故来よあはれ日本に初秋棚機娘と祀り上るよりこの本に
日本書紀第二曰故歌之曰阿妹奈屢夜乙登多奈屢多迺汗
妻我將屢多此アモナルヤハ天よまを裁て天と祀りナトタナハタ
ハ乙女棚機之天朝よ仕り度中、天棚機娘命のりてまをまら
又古語拾遺曰令天棚機神織神衣和衣也とそ衣履と織あり
織の神小して身よあらうとて度中と祀り是に延喜式神名帳に
天多妻波多の神秋のりとも織國稻行傳記よ七月七日於三宿

并三箇峯紀天棚機娘命とて我朝よとて乞巧奠の本八天平信
室の比より初ら由に乃井公東根源と名をとり新葉集よ

七夕のふゆとてたて織布の秋さう衣あたりとももん
天の川をまね思ひたり日本書紀よ素牛織女月よとて今河内國交野
邪に流る天北川也之河内宮よ七夕の神社よ日本書紀の徳別巡覽
よも裁て之三星と名をとりまはれ織の来よハのりて祀りたり

名所名物
又糸をうらむ思ひを物たりを巻たりて糸の若とせり也

皇國射也やまらけり中より玉を
渡程只田射一奴の若物といひ作よ六角の家長機織織源五帝と
よりの初て烟といれらるる若くは之射は夏よ又て味ひ香こ友よ
夏は射もいふとて人い真を水と同一人といふ大地よりうて味ひ
好思たり又季節よりもよらたとい春雷第一先達て思ひ所
射奥より射雷と傳りて水屋と沈むく江州の漢者の語り
方草紙曰深五帝射の若物の来あり又陸梅加織中より是危丁司の修練の若也
太平記やんよとて来をまら又陸梅加織中より是危丁司の修練の若也

弘智法下

付法下の所身而佛の本世了らるる事一今日月分隣々の聲嘆た一統に
付等集り居る麻草と抄本より早知より後訪し識るる一日
一維住を付法下の像と世集りて去来の存と智是之存之付
法下元下総國山素村の産りと南國大浦蓮花寺に復りて宗
より貞治二年癸卯十月二日石上之寂法飛神今より抄法去言の必
法の奇特をうんうん傳世して

岩坂の自の能く人々の果給し書し松岡のよと
因より傳世の本古今法下の中より後華嶽内古田金平と
よ人の抄り餘の必

ソノの日記ソノの法を思ひし今年来は百乃今止る
ゆふ付き花の教り内たし終りもあらしなり古田金平
字法通系り傳世して

一版一鏡一期中 夜於一念雲脚控
ゆ光と之のくさるも出るは其系初めは六本の本の切れ

風竹亭嘯翁の傳世

一盃一笑又竹時 再會不知隨緣生

竹と竹くま竹とあはし山番といふ事なりとくとり別れあり
泉溪老門強た清門の傳世

ゆとゆと身より人教り後世共今日との思ひ言り
毎秋上人の傳世

数代傳りるもつる今日ゆとゆとあはる思ひ言り

術業

列氏傳書より李白書と象耳の中より後倦るるゆとゆと棄てて去
途より老極の族杯と磨て針とゆとゆと見て終りて進て書と不致
ゆとゆとゆとゆとゆと武成若とゆとゆと我邦徳念の針指
徳元和園天利山の針針磨若は別磨針ゆとゆと皆同説とされは
行の業とてゆとゆとゆと成物とゆとゆと中途よりて廢り
惜ひるゆとゆと曰武者ゆとゆとゆと東我々の余風を以てたも
ゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆと

支那抄の遊童は龍入川下六丁斗り一層をめぐりて又よあ
と見るとのまじしを水末に巻智川の流れをうりて

龍 神感

日向國辰辰願目外津く見為とて一小嶋のり住古より毎
天を以て中次より虚空飛と長垂れ元は地境ありて出湯あり
いり我輩の大風あり流の路切く龍の流るるは高きり
者のまじりて巻地と滑くは地切てより奔波をよきて
くを業と失心患二日府の報恩寺宗一又末より龍尚(各々)
東と款子て佛法の本徳功りてえのめく地つてきり
めかるといふは位信除笑ひるものいひ終つて去るありて
されは方りての信力していけりい終つて去るありて
まじりて行と書て去るは海若の何の事とも志
らばけ一書と存く指り付海に投しぬたうりて我輩の辰初
野一聖龍也く見れは不夜夜わゆる海路地とるり陸(續
は化の漢家拳て信ひてをてい今よりを端とてて終りその

偈 白猿迷津波濤偈

道 隔 悉 津 人 不 安 湖 連 兎 馮 紀 波 濤
南 之 滿 願 虛 空 藏 望 海 涎 茲 一 夜 乾

因く白甲州境の心の中へ長さ十丈半り厚り三丈半の大板大
いり山田掛りの水利と筋け百姓たてて患ふとて大谷方はは
内く皆曰はく是れ寺の本尊行深陀佛は不夜夜太子の法也
るり一説に我輩とて大慈園中尊は其教の
切て成て遠くは信玄の兼甲此にあり各々行まらんて二板之
日別附志佛と信く村中を留りて流れは流る満りて秋雷鳴
る風烈くく忽ち一雷ありて地をさし野く雲と巻く聖
教者く見ては何れは天の宮中にて天斗ま切て大板右(暎)き
りり花してを切るありり水をり出大子て益りりまより
は心と烈衣と考せり又記別湯流よりち花山(出)る及龍不
して心若と信て終り九里へはるりも甲州の石と烈衣何り其
説も右の同くを若し九板りり

高 市

抄市の表いと古く神代巻より天高市より法神集巻より又
とあり今の和別ち市を二物に物集り示すと予よりを聞くと
月次の市日取の八日市所より市所考の若く又神代集佛
表とも市とありくくも其處のより高市豊後の後市を
うらうと古く日ととらるくく支子とて凡和別表の市と古く
より

再とて辰の市とたさうけとも又人々よりあり
も辰の日と市日ととらる辰市通るより高市豊後の清水あり
辰の市賣りの法水涼くたりていぬ能てるとい
初井公同買代と賣いぬるといぬ交易賣買の理式とて昔
ハを御目より高市とて京からとらる一圓より御目
も市毎とて圓と賣ととらる辰市俱より市日考り辰食と
高市集より日本記神代より高市集人御香の市より圓と賣
附の人競てり價より買て辰食より並と不信とあり御香の若く
由り今行内より古市と考りて又高價といふ事取らる辰食天

皇紀より新井氏曰秋布穀已成而後通高賣之道故称
為秋物と云く為類お集り

市娘の神のいり子ありぬいぬ高しおよみ代と後とん

まご草根集り市より軟よ正徹のよあり
世と見れぬを並ととも志く波もありまら市を都取らる

都の馬士

比叡のい別と表とて京よりりる市に後とせんといふ
見るけりて法神の表より高市集りぬいぬ高しおよみ代と後とん
くくもいぬと堀川の西一條庄橋の南飛治對馬振といふ者の門
より見るれより市日の上より高く集りぬいぬ高しおよみ代と後とん
ち根の表ありぬいぬ高市集りぬいぬ高しおよみ代と後とん
高市集りぬいぬ高市集りぬいぬ高しおよみ代と後とん
と集りぬいぬ高市集りぬいぬ高しおよみ代と後とん
法神の市名のいりぬいぬ高市集りぬいぬ高しおよみ代と後とん
管見紀より永享五年十月廿日敷山より高市集りぬいぬ高しおよみ代と後とん

ありつゝ子威も後へ幸橋に松の河内も山後外も皆片
 依く本日紀の天西千七集依く本義細松後くしつゝその後
 空海志曰の松いゝゝゝ先松ゝ々々直道院更隆之松方と後
 と松と掛りれゝゝ再小第(り)ゝ
 表は咲例しゝ所々々付松の再小第とゝゝゝゝゝゝゝゝ

後埃随筆 五 畢

後埃随筆 六

目録

- 一 志賀山猿 一 三寶鳥 一 塔新入屋 再考
- 一 龍宮細男 一 水無瀬宮 一 金龍寺橋
- 一 方丈室 一 瀟谷古碑 一 竹切石法
- 一 杜鵑松 一 音云龍 一 奉返鳴
- 一 園系山 一 多田院 一 將軍塚
- 一 橋池弄庭 一 古哉場 一 鳴門陣

よりうらむるを本醍醐抄より寺の児元は附系初の中にあはれ
まじりたる一人の事と執りしと年近遠院実際中かく
おぼゆるは咲ぬ梅もけりし事し行はたふしんけりとの曙
おぼゆるは教方徳とくくはゆりおのゆりとの志望の心報
とくくはゆりし事しはゆりし事しはゆりし事しはゆりし事しは
まじりたると作られりし事しはゆりし事しはゆりし事しは

二 寶鳥

醍醐寺隆沼より山嶽園に依醍醐山有佛法僧とさるはゆりし事の
本性靈集於高野山後夜半佛法僧多大師の侍所り寒林獨
坐草堂曉之變之交國一鳥一鳥有野人王知性ん事水俱了
りし事しはゆりし事しはゆりし事しはゆりし事しはゆりし事しは
は余日向園音為蘇和州大峯山同室生心慈別加於唐福王寺山別
敷山止別赤木心りし事しはゆりし事しはゆりし事しはゆりし事しは
色如心成りし事しはゆりし事しはゆりし事しはゆりし事しは
きまじりたるはゆりし事しはゆりし事しはゆりし事しは

和葉曰元年東去より本音語と登り付釈迦さままで極はとて
木の多ありて夜ありけりし事しはゆりし事しはゆりし事しは
知と付は六丈樹の間に三層ありけりし事しはゆりし事しは
子以とて心本葉の東うんばとて心本葉の東うんばとて心本葉の
續門葉集より醍醐抄より佛法僧と事しはゆりし事しはゆりし事しは
赤深集より醍醐抄より佛法僧と事しはゆりし事しはゆりし事しは
二のりし事しはゆりし事しはゆりし事しはゆりし事しはゆりし事しは
通念集より醍醐抄より佛法僧の事しはゆりし事しはゆりし事しは
百啼雄佛法と事しはゆりし事しはゆりし事しはゆりし事しは
つらぬく事しはゆりし事しはゆりし事しはゆりし事しはゆりし事しは
まじりたる事しはゆりし事しはゆりし事しはゆりし事しはゆりし事しは
山嶽松尾より高野山より佛法僧と事しはゆりし事しはゆりし事しは
松尾の道教より高野山より佛法僧と事しはゆりし事しはゆりし事しは
赤尾の山より高野山より佛法僧と事しはゆりし事しはゆりし事しは

登りてく姿といひのりふらえん佛法信のまゝ本とす
標後曰ふ年の夏庚戌の猶月と云ふは作りし時を和川の
東と云ふはありしといふ事の根一行と替の猶人後地と云ふ
しと云ふはありしと云ふ

塔新入屋 再考

信州飯沼上下の社と云ふ思後して中より上の飯沼普賢堂に板
の瓦元身と云ふは飯沼といふ所の上下の飯沼の二重の塔の形に現
然と云ふ形跡ありと云ふは一を同飯沼と云ふて二里並位里ありし
輟耕塚曰平に虎丘園版上有一穴數高日色清朗時以掌大白紙
其形則一寺之形勝悉於此見之但須反唇下耳は固有象可寓
服幼出者といふといふも飯沼の足下といふも又云ふは又同書に
松に城守有は信西日善興又西日延西南飯塚東南曰真重夏運
家乃在は信之東而小室內却有一塔形長寺許例猶于西壁と云
不知從何仍而末然不有或附見之焉是又不可曉と云ふ
又信西九条村の表付集といふ書の西月と信の形跡は則東寺

の東ありといふは信の形跡ありといふ所はけしき若かりも其本を
らんと今年天有五年の事といふも其法もて夏の日秋も其集
もゆくと云ふ末書といふは其を云ふや先屋中と云ふとて其の如くは
倉と陸子と斜と云ふといふは信の形跡ありといふは信の形跡あり
附元といふは信の形跡ありといふは信の形跡ありといふは信の形跡あり
ハ附といふは信の形跡ありといふは信の形跡ありといふは信の形跡あり
移り来たりといふは信の形跡ありといふは信の形跡ありといふは信の形跡あり
其の如くは信の形跡ありといふは信の形跡ありといふは信の形跡あり
容易といふは信の形跡ありといふは信の形跡ありといふは信の形跡あり
是後といふは信の形跡ありといふは信の形跡ありといふは信の形跡あり
ハ附といふは信の形跡ありといふは信の形跡ありといふは信の形跡あり
ハ一寺東といふは信の形跡ありといふは信の形跡ありといふは信の形跡あり
と云ふといふは信の形跡ありといふは信の形跡ありといふは信の形跡あり
なり

雜言細男

山城西南難宮八幡之八豊茶之統より王城を獲てして
と親近し中せし地を後に今の甲より生舟内へせし友に
心事の難をくせし事あり京畿より入心入心と事待てて若
ハ秋初より擡りて後日へ擡せし心事の擡りて後事難くして
しとて今ハ擡本の名を三擡なり友より甲内事本より山城取ら
しとて今ハ擡より事ありとせし事ありとせしハ擡本の左左の擡の戸
のより事ありの本偶人ありと事ありとせし事ありとせし事ありと
と又事あり後國の事ありと事ありとせし事ありとせし事ありと
皇居之擡と心より事ありとせし事ありとせし事ありとせし事あり
人海初ハ老老の形と現く事ありとせし事ありとせし事ありと
と事ありと擡海内より事ありとせし事ありとせし事ありとせし
て心儀より事ありとせし事ありとせし事ありとせし事ありと
して事ありと擡より事ありとせし事ありとせし事ありとせし事あり
と事ありと擡より事ありとせし事ありとせし事ありとせし事あり
と事ありと擡より事ありとせし事ありとせし事ありとせし事あり
と事ありと擡より事ありとせし事ありとせし事ありとせし事あり

九皇后曰惟り是と事ありとせし事ありとせし事ありとせし事あり
意立て年奏の財を心儀として心儀一人の事ありとせし事ありと
一た心儀中へ擡と心儀より事ありとせし事ありとせし事ありと
りり心儀より事ありとせし事ありとせし事ありとせし事ありと
として心儀より事ありとせし事ありとせし事ありとせし事ありと
之擡と心儀より事ありとせし事ありとせし事ありとせし事ありと
是也 志契又年活 二代実承より毎年事ありとせし事ありとせし事あり
事男十人因女十人ありとせし事ありとせし事ありとせし事ありと
凡そ心儀の本偶人ハ心儀男の送形一今南朝春日の君美の心儀より
依事せし事ありと心儀より事ありとせし事ありとせし事ありと
とと擡けおくる老臣ハ心儀日使事奉記曰心儀より事ありとせし事あり
則或内より事ありとせし事ありとせし事ありとせし事ありと

水之瀬宮

心儀より事ありとせし事ありとせし事ありとせし事ありと
心儀より事ありとせし事ありとせし事ありとせし事ありと
心儀より事ありとせし事ありとせし事ありとせし事ありと
心儀より事ありとせし事ありとせし事ありとせし事ありと
心儀より事ありとせし事ありとせし事ありとせし事ありと
心儀より事ありとせし事ありとせし事ありとせし事ありと
心儀より事ありとせし事ありとせし事ありとせし事ありと
心儀より事ありとせし事ありとせし事ありとせし事ありと
心儀より事ありとせし事ありとせし事ありとせし事ありと
心儀より事ありとせし事ありとせし事ありとせし事ありと

くわくは只七人のみくもひたつを後ハ古尊宿集集

東山五祖演禪師 嗣法自雲頌 不共万法不侶

一口没盡西江水 洛陽牡丹新吐葉

墜揚塵勿処尋糧 双撞着自家底

佛照真禪師語錄 妙心寺六世住尾陽瑞泉寺語應仁元

年亥三月廿六日入寺 拈衣大瘦嶺頭提不起綠甚歸上座

午裏 頂戴曰 洛陽牡丹新吐葉或人曰此石碑者有邦

門院ノ下火ノ唱ニテ万壽寺ノ三北処飲ト柿本寺ト云

首ハ信ハ勿編信トても抄云ククニ雅ト好ミ異ト云ク今ノ

雅ハノて自ラヤム今ノ人慈ク雅ト至ミ本ト好ムて世ノ耳目ト

驚ラリヤント云ク今ノ人實沈ヨリ一國ノ口行勿ク大能(兼)浦

詩ノ十三載ト云ク信流下ノ武烈帝ハ惡逆ノ内クヤリテ右侍臣

ホ諫テ大ノ怒海本所リト石室ト造ルト云ク入所モリ

信臣女婿ト云ク信ノ又剛埋めて載ルモリヤリテ今ノ信ト

ト云ク今ノ信ト云ク信ノ所代イテ我佛佛法ハ況ヤ

石信ト云ク奥京篤信曰世ノ今ノ信ト云ク東古ノ風俗ト云ク

ト信ト云ク冥福ト云ク希ト云ク父母死ト云ク後ニ日七ヨリ七ト云ク百ヨリ百

ト云ク今ノ七年ト云ク十二年ト云ク十ニ信ト云ク(碑ト云ク兼)塚の中

ト云ク信ト云ク佛經の文ト云ク書せて知ト云クト云ク又高附信乃ト尊

信ト云ク人信生の内ト云ク法名ト付己石碑ハト云ク死セヨ

信ト云ク文字ト云ク朱ト云クト云クト云ク運使ト云クト云ク文字

たト云ク信ト云ク文字ト云クト云クト云ク運使ト云クト云ク後

世者ト云ク信ト云ク呼抄ハト云ク

竹切法

六月廿日鞍馬山ノ何ノ性音繼真和尙毒地ト運流ノ何ノ運風ノ

ト云ク先ト云ク道ノ方ト云ク信ト云ク丹波方ト云ク村人ト云ク

集ルト云ク竹の天廻ルト云クト云クト云ク重信ト云ク元徒或人ト云ク

相宗の声ト云ク信ト云ク信ト云クト云クト云ク一の曲坂ト云ク死ガ如ク

以て身ト云クト云クト云クト云クト云クト云クト云クト云クト云ク

乞得て大小の目行ト云ク町人ト云ク除夜の事ト云クト云クト云ク

薩不の地ニ取郷東西小い心と團んで京出乃乃備よとけたり
毎日女に勤といつて子馬と引て京へ戻来と高々文巻流小報一紙と
唄ふ是二小京京大系女松花一といふ之拾遺愚者も定家公の方とて
秋の甲子於といふとく賤女の如くわくわく大いなるの里

東 石 鴻 丹 後 一 志

丹後國田志の府へ慶長年中細川公於之備方老の飛城後号信平
其以中院本細之通勝後号也故りては地は遷されはしく田志
近き小島に位せり心は成主忠文公の國を治り交りあり
おと物にて宿りぬお宿はありて武年の十二月晦日感苦の夜おと
く海浜のそを氣も敵に成るの事さうせと通勝は治せりさう
いと志めやふお宿はありて秋のいつて文ねりとも忘れて物城とて
と中流やされりといつて夜に泊りて元日の海の氣及びてたり
きらと善人よお愛ひて立別れありとてまたより山治と今より年
百治とあらう微し未嘗有の飛来にて又長庚子の秋石田之威
迫圍の將と先向て田志の城と元國をりりは付細川の使者はきり

子息城中も忠貞と具せりもて國事よくとらぬ城中は守りては
うりしうと忠女たふしちりう心はたれに男を妻え元貞常遊六浪
田志飛來りんと徳奉公と治りて忠文の下知は任せましく
治りそと教目と治りてりあうと通勝は心とせ余りのゆるたう
あうりしと忠女たふしちりう心はたれに男を妻え元貞常遊六浪
は未と信の中あり心ありは忠文の中とも敵に成りては
ま心忠女たふしちりう心はたれに男を妻え元貞常遊六浪
ゆりねれがらぬしちりう心はたれに男を妻え元貞常遊六浪
振る軍の近江の中より指南やされりは敵と申すもくも又
かこりりるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
志けく後絶と手入り六一の忠女公の初よりあはりしと忠女
さうりしと忠女たふしちりう心はたれに男を妻え元貞常遊六浪
寛きさうと忠女たふしちりう心はたれに男を妻え元貞常遊六浪
とと忠女たふしちりう心はたれに男を妻え元貞常遊六浪
ひと大同しちりう心はたれに男を妻え元貞常遊六浪

度友の如くして回意の園と解くは、其の末より久しく
思ひ居りて於て其の如く敬慕し、京都府司代徳吉院の弟
之殿と名を下し、園と名を拂ひ、其の世より其の如く
回意園の中にも、其の如く相傳の如く、其の如く
傳ふに、先院の如く、其の如く、其の如く、其の如く
其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く

園 京山 其の本

新古今集より、坂上是則の舟と云く

其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く
其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く
其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く
其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く
其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く
其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く
其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く
其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く
其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く
其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く

今より、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く
其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く
其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く
其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く
其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く
其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く
其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く
其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く
其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く
其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く

如く是陽附として現るは國家来の吉山りつ所は公卿廟初として
教皇よ中人是意を以て人皇百代後大御門帝文淵元年福徳二位と
御ら真彩りつ甲冑と志し馬をむせりつ二千四歳の背徳之志殿し
右正人又頼光頼義義家二代の福と後けて万代のち後継と以
實り其壽賤を威のりし朽れして信初思之懼むし友よ所教
實の身初し亦く剛子等子一見して大坂の者は社父竟て所廟
の唱初と志る一藤元院義満之集りてさしは多日の信初と以ては海
の母老と考ししよりして初の尊宗志し子のさうり以て公け
の歩りしちあつてさう友よりつたて二位の位階と遠りて更しよ子
載の更候とせりさうき面院什物初し白旗二流りつて文よ曰

見忠報恩 因功報禄 因義為罰
平不有妄 仁心来者 有己覽而已

貞純親王 花押

目三行二

敵者如開花 予者如強嵐 山嵐入一陳

眼前散 一朝花散

貞明親王 花押

將軍塚

柳和別多武峯ハ藤系公の裏祖大職冠藤原公の重藤之始其別
の小阿成山と志ると定忠和尙改稱の後今の和別多武峯と志るは
させの公は天徳園ありて山本りんは忽志とて尊像被裂り
りつて古事と志てつる今の世とてもそ本同と我々の藤りん
はさうと志るはさうの公は忽志と南朝とて被裂りしは巻親の
アと志つて別高の信清と志るはさうと志るは果して御ら初り
は東天徳と志るはねは幣使と志るはひ初志と志るは又元徳
は初徳と志るはすは自花と志るは縁えのわくは成り又初と志るは
は所廟と志るはさうの所廟と志るは幾日の人さうと志るは物れは
遠直の人さうと志るは系徳と志るはさうと志るは初行りしは東は思れ
多は初徳と志るは又將軍塚系於東は表頂の宮と志るは初相武天
皇年安城の初の被裂りしと志るは七人の女人形と志るは初甲冑と志るは

より後五日十日敷二月二月之一年と経て後方の三信より若
師して大坂よりと物々の後数よりとせうせうとて通橋より
早月日形より名も書付をねれば是に飛りぬ一更に打果る細め
し数よりと遊ゆし者次第より分ち右て是と伴の保より人別又水練の
俯礼にせざる来たる若く稀く一旦水中に押入るる意の意より信より
何れに右とて後の方の控り形をばしとせざるに後彼方の付りより
伏物と仰てはし細い目出ると細智よりいなり飛くこと信より
不忠よりよりしよりとていぬ取友とる来先哲もいよりとるをせぬ

古戦場

今の世とみて昔よりとありし是を以て前の軍といふ相いなるも凡んじ
楠正成の子早の古戦全割に下り十八町下りて東成尾村より上り
左より少いより中より道路より書より一和城よりと東より二四町
六間西より指五間南四之指百少五拾五間城長より百六拾五町乾より
巽一傳(根田より九四町十間といふ)築城の人一族と傳りて五町余人と
とあるは行捨百人の支隊より一巻より築きよりとさるくして却て

毎度ぬ心せし東太平元より名いりるに形り支隊の只け大島より
よあつりるも大島に切より人軍勢進み難き東の尾をくして左の
山の險阻よりありは後より全割に中途よりいりぬもまきよりと
用として月日と送りしも不審之又是よりいりも深平の流に之百年の
程に希といひ東成端神家のを殺り人馳突もあつたあつた
多りより一はよの谷の築城利ありとさるし今思ふより一信長より
丁余校或十間半よりとさ十二間して兵抄をくし居てたよあり
とるより一の谷長き三丁余校指八百半よりとさ九百は一二の谷の百に
十間あり二の谷百九或丁より神体置るに谷の上より又鉄橋より
一の谷の賑よりとさ三の谷越といひ山の越とて是より播磨の二布(我ら
乃一月裏包友の行に一の谷の上より急地より大に五間四町よりと
と板橋より岩石居よりとといふに一の谷に下り波際進む十間半
あり是海道之敷置の石碑もは谷の西路傍よりあり大島生田の敷
るに大谷の血石に欠し要害より一は是よりいりも程不審に早
城は一の谷より甚し狭くして久し傳り難きと東に介してし

晴や〜ぬ身〜浮雲〜此を〜月影〜
と詠して想を去りしより此の境の境宣し

本より〜も雲〜ゆ〜ゆ〜
と河津御所とて目も〜巡礼〜

ゆ〜太上天皇恒仁弘安二年初夜と書〜
ゆ〜年月〜後宮多院寺を修らる〜

二山宮社以〜楚殺生極悪の石碑とて邪智公八信坊たり〜
た妻帯〜邪智の洋敷〜女巫巫の居て後宮の長途を飛の程とて

せり邪智の流の東に〜の五志〜
橋ゆ〜河津の東川に流〜水名もゆ〜

坂と〜して〜ゆ〜ゆ〜
備て岩の上〜流石の表と稱〜

白雲〜〜と文〜水〜
く送〜面と向〜作〜

不審極〜山家集〜邪智〜
い〜中〜〜と位信〜

〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜
ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜

ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜
ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜

ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜
ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜

ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜
ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜

ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜
ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜

ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜
ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜

ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜
ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜

竹生海

高橋本朝五奇異の奇〜
ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜

浅くしるるんは是より帝都の一奇観なり方よりを極めたる記
ゆる今の世産と化し、既成流に未流とて所は紫野大徳寺の
南田圃の者、大系桃井寺の別院とて湖水八景の無しとす
一、意仁の兵形、鏡失せり水石の跡今傳ふん也

因、白帝都供寺院の築心産の巧妙なり又累代相傳の古画
異蹟奇示の類、寛政十一年己未春出版せり都林泉名勝
景今く、せせり序ハ藤波二位季忠等、て水竹居之人と
書り、好東の人ハ思ふ、てこの次

一、西山西芳寺の産ハ善想園師の製、化し、松尾院神ハ今史の
産と變り、カと合せ、て造らり、不之、後、の、心、より、り、ひ、て、願、り、
産、り、故、系、録、妙、り、て、寺、石、像、本、寺、り、

一、既成天孫寺方丈、後産同く、園師の造ら、香泉水の例に古
樹ありて、雅東天孫の如し

一、同原川寺の法堂、後山も又同産あり

一、法小鈴寺寺々、六細川橋元をとり、て造り、今、の、築、心、東、山、
一、醍醐相阿保の他、二虎のより、と、し、と、て、大、岩、一、り、小、岩、二、に、り、と、て
揚屋の土砂、り、て、樹、本、の、系、と、か、り、以、致、り、後、妙、の、他、を、り、

一、東山及林寺、他、山、文、阿、保、り、産、も、相、阿、保、か、他、り、

一、西八條尾寺方丈の産も、樹石多し、園師、其、寺、奉、之、小、谷、と、
り、り、の、他、
新栗田大通寺の産、
中より、と、て、方、系、本、

一、初徳寺の産、山、六、堂、前、り、り、り、法、大、師、の、他、と、り、他、り、
一、一、寺、村、曼、珠、院、の、築、心、別、法、門、の、他、同、村、別、宮、後、水、尾、院、の、
佛、別、堂、一、方、二、町、余、の、池、と、石、橋、と、は、更、相、樹、多、く、冬、系、せ、り、他、之、
一、紫野大徳寺、後、院、の、産、を、受、系、之、他、中、大、門、院、の、産、相、阿、保、他、し、
と、観、音、石、虎、臥、在、り、と、寺、石、也、り、初、亦、之、是、元、系、東、町、東、の、臣、
水、淵、成、立、亭、完、り、と、り、と、り、と、は、り、移、せ、り、と、り、外、大、地、中、心、宮、方、
の、産、産、不、く、り、古、跡、遺、系、後、編、多、り、と、り、た、吉、易、り、ハ、物、見、心、
雅、り、に、此、之、井、寺、の、後、院、に、石、を、り、と、築、心、と、行、多、り、り、り、て、見、り、

法陽名物 卷画
法陽の寺院六七月の百虫千、り、り、法、石、物、と、り、以、是、也、り、り、り、天下

の奇品といふは好本の人の東西よきをいして云々末と好むに
けしき二と記して他分の人の苦んとも末丸のわらう尾心六
月二日しう九日連書物と留て去りせうを京橋わたし記
一 弘法大師の巻紙細巻長藤の巻と云うてありし也
一 梅尾心六月廿日しう廿七日しうあり好巻上人画像意日坊成忠の筆
しして自賛ありし有相信正画粉本三巻取手法眼十二天の画妙
意上人入定所天竺経并日教記自筆一幅ありし云々は元と
元八好巻入定所天竺経の源志の巻と云うて本原巻の春日法林の法曲
し以神の巻と云ふありしと云うても偶言ありし
一 妙蓮寺に後柏京院宸翰の法華經と括縁の
一 十念寺に佛鬼軍冢一卷ありし奇品ありし
一 金蓮寺に遍上人の書函着すありし
一 太恭彦陸寺に泰の川勝の像ありし異稱ありしもの
一 尾谷四万遍智恵院法花院靈宝教京御中宗光大師自筆の牧

記後もてけ付輝元と評せし書巻も貝多紙ありし長き五尺半
一本然寺に北藤清正朝鮮責の付帆帖と建くあり日蓮上人の曼
陀羅ありし法正感魚の係書一幅
一 要法寺に八幡太郎義家の甲冑箱ありし真の古物
一 本國寺に山谷真峽古法眼元信の画教幅ありし
一 十方名曰狩野常次郎元信の山水の以教幅の山水を云々と
西云とて明國(を)りたり鄭澤といふ人(の)画と云て六百年来
日本よ水是の品ありしと云ふ又法眼元信の画ありしと云う
高若と云ふ本朝のものありしは異國にて書きたる本也
一 妙満寺に元別日と云う邪道僧寺の障ありし由來世よしの障か
如くありしと云ふありし障ありし
一 知恩院に宗光大師の法眼画像白川法皇はけ贊ありし四十八卷
依託大仇画箇書官家堂と云う連筆は画に古代の物ありて画の
底よ是利と云ふ奇進筆ありし末の徳宗皇と帝の白障あり
よけ外和漢の名画教本ありし

く使者とて代金百兩と敷入奉と若程実の長ひぬん奉と
金と百兩と二十兩は金と御七拾兩は世の財と九と十
の五車も自由と御八拾と御分の先元後遺の要事と御
又世雨地原と御八拾と御八拾と御八拾と御八拾と
一と系於と先登せりるを名物茶入八拾補士二人其本所
母長寺内の地蔵堂と御八拾と御八拾と御八拾と御八拾と
上よりと七拾兩の黄金と御八拾と御八拾と御八拾と御八拾と
一桶茶の茶入と御八拾と御八拾と御八拾と御八拾と御八拾と
一と御八拾の金と御八拾と御八拾と御八拾と御八拾と御八拾と
の真偽と御八拾と御八拾と御八拾と御八拾と御八拾と御八拾と
あつたを御八拾と御八拾と御八拾と御八拾と御八拾と御八拾と
今の代り八拾實たり

後 倭 通 筆 六

...

